

〈地元〉に住む若者たち

——大分の町を事例として——

長崎大学 中島ゆり

1 目的

本研究の目的は、若者たちのキャリアにおいて地方に住むことの意味を明らかにすることである。近年、人口の東京一極集中が問題となり、いかに地方に人を戻し、地方を活性化させるかという議論が盛んである。地方に人を戻す上で地方の中小企業についての情報提供、雇用の創出、地域人材の育成などが課題として挙げられることが多いが、そのような条件が整っていない現在、すでに地方に住んでいる人々は、なぜ大都市ではなく地方で暮らしているのだろうか。自然が好き、都会の忙しさから離れてゆったりした生活を送りたいというイメージの、俗に言う「田舎暮らし」を楽しみたいという一定層が地方に住んでいるということなのであるだろうか。雇用を創出すれば地方に戻ってくる人はいるだろうが、そのとき、すでに地方に住んでいる人々もまた、そこに住み続けることになるだろうか。現在すでに地方に住んでいる人々が、なぜ地方に住んでいるのかを知ることは、今後の地方創生の方向性を検討する上で重要な基礎的資料となり得る。本報告では地方に住む若者のうち、とくにそこが〈地元〉である者に焦点を当て、かれらの人生において〈地元〉に住むことの意味を考察する。

2 方法

本研究では、2013～2017 年度において大分県の中津市、別府市、佐伯市の市街地近くに住む 20～40 代の若者のライフストーリーを聞き、かれらの人生において、現在いる場所に住むことの意味を探った。大分県は人口 116.5 万人（2016 年 2 月現在）と人口規模の小さい県であるが、本研究において、いくつかの町に住む若者を対象にしたのは、大都市（福岡）からの距離、地域の産業・職業や観光資源、移住規模と〈地元〉の者の相互交流の度合いといった特徴を背景に、各地域の若者のキャリアと意識を比較するためである。調査では、これらの地域にずっと住んでいる者、進学等で一度、離れたが戻ってきた者、この地域に移住してきた者のライフストーリーを集めたが、本報告ではこれらの地域を〈地元〉とする者たちに焦点を当てて、分析を行う。

3 結果

分析の結果、同じように〈地元〉に住んでいるといっても、地元活性化や町おこしへの関心の程度、〈地元〉への愛着の度合いや人生における〈地元〉のもつ意味は異なる。〈地元〉を離れないという「選択」は必ずしも〈地元〉への愛着を表明するものではなく、出るという選択肢があることを考えたことすらなかったり、出ることに對する恐れの出でであったりもする。かれらにとって〈地元〉は活性化させたり、よりよくしたり、好きだと感じたりする対象ではなく、生まれたときからただそこにあり続けるものである。他方で、〈地元〉にあえて住み、町の活性化を意識している者たちもいる。一般的に「町おこし」はイベント開催が想像されやすいが、〈地元〉に住んでいる人々にとっての町の活性化は、ときにはイベントを計画することもあるが、日頃は単なる経済活動の一つとして認識され、粛々とした日常が重視されているのである。

4 結論

〈地元〉に住む者ですら〈地元〉という場所に対して見出している意味は異なる。〈地元〉に住むということは〈地元〉への愛着を必ずしも意味しないのである。

※本研究は JSPS 科研費（25780507 および 15K17377）の助成を受けたものである。